

辞世歌に現れる背景について

竹島 圭祐

自身の死に向き合うという行為は古代から現代にかけて広く見られてきた行為である。その向き合い方には様々あり、遺言、遺訓、遺偈と多くの形態が存在している。その中でも死に直面し、自身の感懐を詩や歌として残す辞世という行為は、後世の人が特定の人について知ろうとする際に大いに参考にされてきた。実際に著名な人物を紹介する書物等の中には、その人物像を端的に表す一言として辞世のことばが添えられることがある。ところが辞世についての研究は、特定個人がどのような足跡でその辞世に至ったかという研究はいくつかあるが、辞世自体がどのような背景のもとで展開してきたのかに注目した研究はほとんど見られない。

そこで本研究では、辞世歌に注目し収集を行い、時代、性別、社会的地位、出典などをもとに統計的に分析することで、辞世がどのような背景のもとで展開してきたのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法として、『辞世千人一首』を参考に辞世歌の収集を行い、頻出語の抽出、時代ごとに区切った際の特徴などを分析する。その際に、性別や社会的地位、出典との関連性を先行研究を用いて、どのような背景、文脈のもとでその特徴が表れているのかを分析する。

分析の結果、辞世歌の成立・展開を論じていく上で、室町時代における辞世歌には多くの着目すべき特徴があることが明らかになった。具体的には、辞世歌の数に注目すると、鎌倉時代以前の辞世歌はすべて合わせて 75 首であるのに対し、室町時代の辞世歌は 158 首とその数を大きく増やしている。これには辞世歌の成立・定着との関わりがあると考えられる。また詠み手の人物の特徴に注目すると、皇族、貴族が中心であった鎌倉時代以前とは異なり、室町時代は武士が主要な詠み人へと移行している。加えて詠み人の性別に注目すると、全体で女性の詠み手の割合 16%であるのに対し、時代別にみた詠み人の女性割合は、室町時代では 35%とその割合が大きく表れている。これらの特徴は、和歌としての辞世歌ではない、個人や事件を語る目的のための辞世歌に変化していったことによる特徴なのではないかと考えられる。

今後の課題として、出典の明瞭化、編者のどのような意図による辞世歌認定であるか、和歌を対象としたシソーラスを用いての形態素解析による研究が求められる。

(指導教員 綿抜豊昭)